

メトニミーと類似性

—ネットワークモデル再考—

田中太一

t.tanaka6002@gmail.com

キーワード：メトニミー 類似性 ネットワークモデル 認知文法

要旨

Langacker の提唱する認知文法は、言語知識を膨大な結節点およびリンクからなるネットワークによって表象している。このモデルは、認知文法がその初期から自らに課してきた「内容要件」から自然に導かれるものであるため、もし不備があるとすれば理論全体にとって重大な問題となる。多くの先行研究が、ネットワークモデルではメトニミーを扱うことはできないと主張している。その批判は、「メトニミーには類似性が関わっていない」・「フレームの共通性は意味の類似性ではない」・「ネットワークモデルでフレームを扱うには修正が必要である」という 3 点にまとめられる。本稿では Langacker 自身が行った分析の検討を通じて、これらの批判を退け、ネットワークモデルはメトニミーを適切に捉えることのできるものであることを示す。

1. はじめに

しばしば隣接性に基づく比喩として規定されてきたメトニミーは、メタファー・シネクドキと並ぶ代表的なレトリックである。たとえば、(1) では注文した料理の名称によって客を表しており、(2) では自転車という全体によってその部分であるペダルを表している¹。

(1) かつ丼が食い逃げした。 (西村 2002: 286)

(2) 自転車をこいだ。 (西村 2002: 287)

メトニミーは、「日常言語に遍在する現象」(西村 2002: 285) であるにも関わらず、多くの先行研究が、Langacker のネットワークモデルはメトニミーを扱うことができないと主張しており、半ば定説化しつつある。ネットワークモデルの基本的な仕組みは図 1 のようにまとめられる。結節点となる長方形は記号を、実線矢印は事例化を、破線矢印は拡張を表している。事例

¹ 厳密に言えばこれは不正確な説明である。(2)での自転車はペダルに尽きるのではなく、自転車全体もまた意味に含むものである。同様の例として、たとえば、太郎が次郎の演奏会に初めて参加する場合に、以前に演奏の録音を聞いたことがあるとしても (a) は自然になる。一方で、(b) は不自然であろう。(a) のピアノがピアノの音に尽きるのであればこのような差は生じないはずである。

(a) 太郎は次郎のピアノを実際に聞くのは初めてだ。

(b) #太郎は次郎のピアノの音を実際に聞くのは初めてだ。

化と拡張はどちらもカテゴリー化の一種であり、前者ではカテゴリー化するもの（スキーマ）がカテゴリー化されるものに内在しており、後者ではカテゴリー化するもの（プロトタイプ）がカテゴリー化されるものに完全には内在していないという違いがある。拡張は、プロトタイプと拡張事例との共通性を見出す過程であるため、スキーマの抽出を伴う²。



図 1 ネットワークモデルの例 (Langacker 1988: 140)

認知文法はその最初期から、言語の知識を構成するのは、「(1)：実際の言語表現に現れる、音韻構造・意味構造・記号構造、(2)：それらの構造に対するスキーマ、(3)：(1)と(2)の間に成り立つカテゴリー化関係のみである」(Langacker 1987: 53) という「内容要件 (content requirement)」を自らに課している³。ネットワークモデルは、結節点としての音韻構造・意味構造・記号構造および、スキーマ・カテゴリー化関係によって構成されている。これが内容要件を過不足なく満たすものであることは明らかだろう。ネットワークモデルによって捉えることができない対象は、認知文法では適切に扱うことができないのである⁴。

Langacker (1987: 1) は、理論の最初期においてすでに「言語を分析するのに十分な概念枠組みは、比喩的な言語を問題ではなく解決策の一部として捉えられるものでなければならない」と述べている。仮に先行研究の主張が妥当であり、メトニミーが、スキーマ・カテゴリー化の関係によって捉えることのできない異物なのであれば、内容要件を満たすことができず、認知文法はその出発点において深刻な理論的欠陥を抱えていたことになる。本稿では、先行研究の批判を退け、メトニミーはネットワークモデルに適切に位置づけられ（てい）ることを確認する。

2. 定義の確認

本稿では、メトニミーを「単一フレーム内における焦点移動」(西村 2002: 299) として規定する。ここでの「フレーム」とは、「認知領域、理想認知モデル、スクリプト (script)、一つの意味の規定に関わる複数の認知領域のまとまり (matrix) などを含む広義の用語」(西村 2002: 293) で

² Langacker (2000: 13) では、スキーマは拡張によって生じるとも考えられるとされている。それは、スキーマは事例の諸側面を捨象することによって成立するものであるため、プロトタイプと拡張事例の関係と同じく、カテゴリー化するもの（プロトタイプ）がカテゴリー化されるもの（スキーマ）に完全には内在しないからである。

³ 認知文法における「内容要件」の重要性については、坪井 (2019, 2020) に詳しい。

⁴ 瀬戸 (1997: 72) は「多義語の記述のために、ラネカーは、ネットワークモデル (the network model) を提唱している」と述べているが、これが誤解であることはここまでの記述から明らかであろう。ネットワークモデルはもちろん多義語に適切な記述を与えるが、あくまでも言語知識の全体像を説明するために提唱されたものであるという事実を見逃してはならない。

ある⁵。このような規定は、Langacker (2009: 第 2 章) による、メトニミーの事例と考えられる諸現象の分析とも整合的である。本題に入る前にまずは、靱山・松本・瀬戸それぞれによるメトニミー規定を確認する。というのも、仮にメトニミーという用語で指している対象が本稿と異なるのであれば、ネットワークモデルではメトニミーは扱えないという主張を検討することは、(少なくともそのままでは) 有意義ではないからである。

一見して分かるように、靱山による規定 (3) と松本による規定 (4) は、多くの点で類似している⁶。「二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性」と「同じ領域あるいは認知モデル」はともに、本稿におけるフレームの一種である⁷。また「一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す」と「ある概念的存在 (媒体) により別の概念的存在 (目標) への心的アクセスが提供される」も内実は等しいと考えて問題ないだろう。この差異は「比喩」か「認知的なプロセス」かという現象の切り取り方に由来するものと考えられる。両者ともに、本稿での規定とも (概ね) 整合的である⁸。

- (3) メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。
(靱山 2001: 34) = (靱山 1997: 31)
- (4) メトニミー：同じ領域あるいは認知モデルの中で、ある概念的存在 (媒体) により別の概念的存在 (目標) への心的アクセスが提供されるという認知的なプロセス。
(松本 2010: 30) = (Radden and Kövecses 1999: 21)⁹
- (5) メトニミーとは、(現実) 世界のなかで隣接関係にあるモノとモノとの間で、一方から他方へ指示がずれる現象のことを言う。
(瀬戸 1997b: 105)

瀬戸による規定 (5) には、これらとは異なりフレームに当たる要素が明示的には含まれていない。フレームを用いずにメトニミーを規定することは可能なのだろうか。「隣接関係」について瀬戸 (1997b: 116) は (6)・(7) を挙げ、「隣接関係」には近接関係が含まれると指摘し、さらに、「視点の取り方によっては、たとえば、日本と韓国は隣接関係にある。地図上では、韓国は日本の隣国なのだから。遠近離接の関係は、表現者の立場からは、相対的なものでしかない」と述べている。

⁵ 本稿で「フレーム」という用語を用いるのは、メトニミーにかんする先行研究、とりわけ松本氏・靱山氏の研究との接続を重視するためである。認知文法においては、(本稿の意味での) フレームは *domain* と呼ばれる。ドメインと関連する諸用語との関係については Langacker (2008: 46f.) による整理を参照されたい。

⁶ 松本 (2010) は、メトニミーの規定として、Radden and Kövecses (1999) によるものを採用している。

⁷ 「二つの事物の外界における隣接性」(靱山 2001: 34) は、フレームが形成される典型的な状況を捉えたものだと考えられる。本節での瀬戸説にかんする議論から明らかなように、外界において隣接しているというだけではメトニミーの成立には不十分である。

⁸ ただし、メトニミーを「焦点移動」と見なすか否かは決定的に重要な相違点である。この点については5節・6節におけるフレームが意味の一部であるかどうかにかんする議論を参照されたい。

⁹ 「同じ領域あるいは認知モデルの中で」に当たる部分は Radden and Kövecses (1999: 21) では、“within the same idealized cognitive model” とされている。

- (6) Turn off / down the soup. (瀬戸 1997b: 116)
(7) スープを止めて / 弱めて。 (瀬戸 1997b: 116)

観察者にとって隣接・近接しているかどうかは、フレームに相対的にしか決まらないのであるから、瀬戸も暗黙のうちにはあれ、メトニミーの規定にフレームを利用しているものと思われる。たとえば (8) は、ハムサンドイッチを注文した客が 20 番テーブルに座っていることを伝える例である。このとき、ハムサンドイッチと客は、レストランフレームにおいて、注文料理と注文者というしかたで隣接しているのであって、空間的に隣接しているわけではない。たとえば、ハムサンドイッチが配膳前であるとする、空間的に隣接しているのはむしろ、料理人やウェイターのはずである。あるいは調理前であれば、そもそもハムサンドイッチなどどこにも存在しないのである。同じように、出来上がったハムサンドイッチを配膳する際に (9) が自然になるような状況、すなわち、各時点でハムサンドイッチと空間的に隣接している客がハムサンドイッチとなっていく状況が成立するわけでもない。これはレストランフレームにおいて、ある客が他の客が注文した料理との隣接性を持つとは考えられないためである。空間的な隣接性がそれほど重要な要素ではないことは、(10) が月の土地の所有者と火星の土地の所有者の身長を比べる文として自然であることから明らかである。ここでは、所有者と所有物という所有権関係フレームにおける隣接性が利用されていると考えられる。月や火星に誰がどれだけ空間的に隣接しているかなどと考えることは馬鹿げているだろう。

- (8) The ham sandwich is sitting at table 20. (Nunberg 1979: 149)
(9) #ウェイターの移動に伴い、ハムサンドイッチがどんどん入れ替わっていく。
(10) 月よりも火星のほうが背が高い。

以上のことから、それぞれの研究がメトニミーにかんして、概ね一致する対象を想定していること、そして本稿でのメトニミーも、それらと（少なくとも表面的には）整合的であることが確認できた。

3. ネットワークモデルでは原理的にメトニミーは扱えないとする主張

瀬戸は、以下のように、Langacker のネットワークモデルでは原理的にメトニミーを扱うことはできないと繰り返し主張している。

- (11) 理論的な検討を経ないネットワークモデルのこの場当たりの修正は、ネットワークモデルそのものの理論的破綻につながる。なぜなら、メトニミーによる意味拡張である B

と元のプロトタイプ A からは、意味的な共通成分を抽出できないからである¹⁰

(瀬戸 1997a: 74)

- (12) There is no similarity to be extracted from the two. Therefore, so far as metonymy is concerned, the network model stops working. [プロトタイプとメトニミーによって生じた意味には類似性がない。そのため、メトニミーにことが及ぶと、ネットワークモデルは機能しなくなってしまう。]

(Seto 2004: 204)

- (13) スキーマと事例との関係で成り立つネットワークモデルに、異分子ともいふべきメトニミー的意義拡張が入り込めば、ネットワークモデルそのものが機能停止に陥る。

(瀬戸 2007: 41)

- (14) ラネカーのネットワークモデルには、メトニミー展開が欠けている。残念なことに、ラネカーのメトニミーへの関心は、事実上アクティブ・ゾーンにとどまってメトニミーの中心現象には至らなかった。

(瀬戸 2019: 311)

このような判断には、E 関係と C 関係の区別という、瀬戸の理論的立場が深く関与しているものと思われる。E 関係とは「モノとモノの隣接関係」(瀬戸 1997b: 68) であり、C 関係とは「類と種の包摂関係」(瀬戸 1997b: 68) である。瀬戸は、メトニミーは E 関係に基づく比喩であり、シネクドキは C 関係に基づく比喩であると規定することで、メトニミーとシネクドキの区別に理論的基礎を与えた。特に、しばしばシネクドキとして扱われがちであった全体部分関係を、近接関係の一種であるメトニミーとしてはっきりと位置づけた功績は大きい¹¹。しかし、瀬戸はこの区別を重視するあまり、メトニミーを適切に捉えることに失敗してしまっている。

図 2 は、Langacker (1995) のネットワークモデルを瀬戸が整理したものである。実線矢印は C 関係を表す。注目すべきは、プロトタイプ (A) からの拡張 (B) として、メタファーだけでなくメトニミーも挙げられていることである。瀬戸は類似性に基づく比喩であるメタファーは C 関係の組み合わせ (A と B の共通部分が C である) によって捉えられるが、メトニミーは捉えられないと主張する。その根拠は、メトニミー関係において A と B はあくまでも E 関係によって結ばれているのであり「共通成分 C を抽出することはできない」(瀬戸 1997a: 73) ことである。

¹⁰ (11) における「場当たりの修正」とは、Langacker (1988) ではプロトタイプからの拡張としてメタファーのみが想定されていたのに対し、Langacker (1995) ではメタファーとメトニミーの両方が拡張として想定されるようになったことを指している。

¹¹ これは佐藤 (1978) の主張を整理し、認知言語学の文脈において述べ直したものと考えられる。この辺りの事情については、瀬戸 (1997c: 161-177) に詳しい。

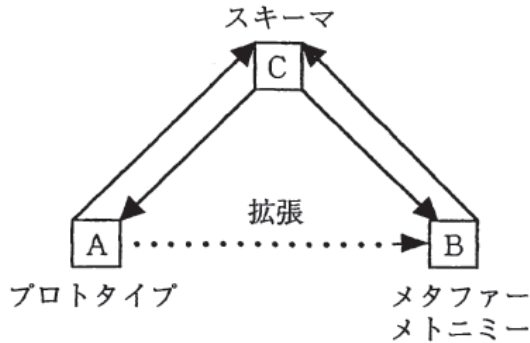


図 2 瀬戸 (1997a) による Langacker (1995) 整理

瀬戸の批判は、「メトニミーには類似性が関わっていない」というものとしてまとめられる(以下では、これを批判 1 と呼ぶ)。5 節では、メトニミーにも類似性が関わっていることを示し批判 1 を退ける。

4. ネットワークモデルでメトニミーを扱うには修正が必要だとする主張

以下の引用から分かるように、靱山 (2001)・松本 (2010) はいずれも、ネットワークモデルは類似性に基づく比喩であるメタファーや、カテゴリーの上下関係に基づく比喩であるシネクドキを扱うことはできるが、隣接性に基づく比喩であるメトニミーを扱うことはできないと主張している。その根拠は、ネットワークモデルが類似性およびカテゴリー化関係に基づくものであり、そこにはフレームや現象素 (国広 1994, 1997) が含まれていないと考えられたことである。

(15) 前者 [引用者注: Langacker のネットワークモデル] がメタファーとシネクドキに基づくのに対して、後者 [引用者注: 現象素に基づく認知的多義] はメトニミーに基づくことを明らかにする。
(靱山 2001: 306)

(16) 今まで見てきたネットワーク [引用者注: Langacker のネットワークモデル] は、類似性に基づくネットワークであり、メトニミーは記述できない。メトニミーによる意味のネットワークの記述には、メトニミーで関連付けられる意味に共通するフレーム (背景的な構造) が必要となる
(松本 2010: 37f.)

この (彼らにとっての) 問題を修正するために、両者は (フレームと現象素という違いはあるものの) 実質的に等しいモデルを提案している¹²。ここでは靱山 (2001: 6 節) の「統合的モデ

¹² 現象素とは「ある語が指す外界の物、動き、属性などで、五感で直に捉えることが出来るものである」(国広 1995: 40) とされる。ここで詳細な検討を行うことはできないが、これは「背景的な構造」(松本 2010: 38) としてのフレームの一種だと考えられる。また、靱山 (2016) は (本稿と同様の意味での) フレームを用いたメトニミー規定が自身の枠組みと整合的であると述べている。

ル」を検討する。靱山は「かたい」の意味を以下のように分析し、図 3 としてまとめている。実線矢印はカテゴリー化関係を、破線矢印は拡張関係を、楕円は現象素を表している。

①意味₁ (プロトタイプの意味)

〈単一の個体に対して〉〈外部から加えられる〉〈力に対して〉〈抵抗感を感じさせる〉
〈さま〉

(例) ダイヤモンドはかたい。この肉はかたい。

②意味₂

〈複数の密着したものに関して〉〈引き離そうとする〉〈力に対して〉〈抵抗感を感じさせる〉
〈さま〉

(例) びんの栓がかたい。口をかたく閉じる。

③意味₃

〈人間が精神的に緊張した状態にあるさま〉

(靱山 2001: 52f.)

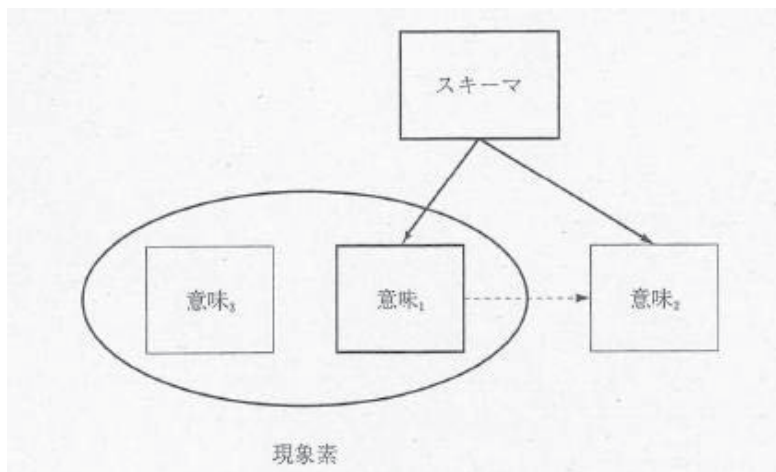


図 3 靱山 (2001: 54) による「かたい」の意味分析

意味₁と意味₂は〈力に対して〉〈抵抗を感じさせる〉〈さま〉という共通部分 (スキーマ) を有しており、それ以外の部分が異なっているため、メタファー (拡張) 関係にあるとされる。

また、意味₁と意味₃の関係は、

〈精神的に緊張した状態〉と〈肉体 (筋肉や関節) 的なカタサ〉 (意味₁) は同時に生じる、言い換えれば「通常、精神的に緊張している時は、肉体的に筋肉などがカタクなる」ということが生じ、2つの出来事が同時に生じるというメトニミーが成り立つ基盤があるため、本来、意味₁を表す語によって意味₃も表すことが可能になるわけである。さらに、意味₁と意味₃を含む現象素即ち、同時に生じる〈精神的に緊張した状態〉と〈肉体的なカタサ〉の両方を含む全体を設定することが可能であり、この現象素のうち「肉体

面」と「精神面」のどちらに焦点を絞るかによって、意味₁あるいは意味₃が成り立つことになる
(靱山 2010: 53)

と分析されている。

たしかに、「〈単一の個体に対して〉〈外部から加えられる〉〈力に対して〉〈抵抗感を感じさせる〉〈さま〉」(意味₁)と「〈人間が精神的に緊張した状態にあるさま〉」(意味₃)には共通部分が存在しない。しかし、すぐ上の引用から明らかなように、「通常、精神的に緊張している時は、肉体的に筋肉などがカタクなる」という現象素(フレーム)の存在は靱山自身が認めるところである¹³。したがって、靱山による Langacker 批判は次の2点にまとめられる。一つは、「フレームの共通性は意味の類似性ではない」というものである(以下では、これを批判2と呼ぶ)。もう一つは、「ネットワークモデルでフレームを扱うには修正が必要である」というものである(以下では、これを批判3と呼ぶ)。

批判2が退けられるのであれば、ネットワークモデルは少なくとも何らかの修正を加えればメトニミーを位置づけられることになり、したがって批判1も同時に退けられることになる。さらに批判3も退けられるのであれば、ネットワークモデルはそもそもメトニミーを適切に捉えることのできるものであったことになる。

5. Langacker (1987) による *bedes* の分析

ネットワークモデルではメトニミーを扱うことはできないという先行研究における批判を検討するために、Langacker 自身の議論を参照することは有効だろう。Langacker (1987: 383f.) では、*bedes* の意味が〈祈り〉から〈祈りの回数を数える〉数珠玉へと拡張する事例が、祈りフレームにおける「祈りの回数と繰った数珠玉の個数が一致する」という連合 (association) に基づくものとして分析されている¹⁴。この事例がメトニミー、すなわち「単一フレーム内における焦点移動」(西村 2002: 299) であることに疑いの余地はない。注目すべきは、Langacker が〈祈り〉と〈数珠玉〉に共通するスキーマを認めている点である。つまり、Langacker はこの拡張を類似性に基づくものだと考えているのである。これは、(少なくとも Langacker 自身の意図としては、) 批判1・2は妥当ではないということの意味する。では、なぜこのような批判が生じたのだろうか。

祈りと数珠玉の類似性は、Langacker (1987: 383) 自身が「なんらかの類似性に基づいているようには見えない」と断っているように、捉えることが難しいものである¹⁵。たとえば、ほとんど全ての場合に、(17)は偽であると見なされるだろう。祈りと数珠玉は対象それ自体としては明らかに似ていない。同様に、(18)における自転車とそのペダル、(19)におけるハムサンドイッチとハムサンドイッチを注文した客もまた、類似しているとは言い難いであろう。先行

¹³ 靱山による Langacker 批判の眼目はまさにこの点にあったはずである。

¹⁴ 注5で述べたように、Langacker (1987: 384) 自身はフレームではなく domain という術語を用いている。

¹⁵ これはもちろん、類似性を意識的に捉えることが困難であるという指摘であって、類似性が存在しないという主張ではない。

研究が *bedes* の事例に触れていないのも、ここには類似性が存在しないと判断したためだと考えられる。

- (17) 祈りと数珠玉は似ている。
- (18) 自転車とペダルは似ている。
- (19) ハムサンドイッチとハムサンドイッチを注文した客は似ている。

とはいえ、問われているのは、祈りと数珠玉の意味が類似しているかどうかであって、祈りそれ自体（祈る行為）と数珠玉それ自体（数珠玉個体）の類似性ではない。(17)～(19)で述べられているのは後者の類似性であり、それが否定されたからといって、前者の類似性が存在しないことにはならない。私（たち）は、言語表現の意味を比較する際、知らず知らずのうちに、そのプロファイル（指示対象）を比較してしまいがちである。しかし、言語表現の意味とは、それによって（慣習的に）喚起される知識の総体であり（Langacker 2008: 39）、プロファイルだけでなく、それを位置づける様々なフレームを含んでいる^{16,17}。

このことはたとえば、プロファイルとベースの関係を考えることで理解できる。「おじ」のプロファイルは（基準となる人物の）おじであるその人であるが、その意味にはベースとして（少なくとも、おじを意味づけるのに必要な範囲の）親族関係が存在している。つまり、親族関係は「おじ」の意味の一部なのである（Langacker 1987: 5.1 節）。また、認知文法が百科事典的意味観を採用していることを踏まえるならば、言語表現の意味に、より広い範囲の知識が含まれていることは即座に了解されるだろう。*bedes* の意味とは、*bedes* によって慣習的にアクセスされる知識の総体であり、そこには「数珠玉を繰ることで祈りの回数を数える」というフレームが含まれている。〈祈り〉と〈数珠玉〉はプロファイルこそ異なるものの、共通するフレームに参与するという類似性を有しているのである。

以上の議論から、批判1および批判2が認知文法の意味観への誤解に基づくものであり、いずれも妥当でないことは明らかである。

6. フレームは使用事象の一部である

批判1・批判2が退けられたとしても、批判3が妥当である可能性は残されている。批判3は「ネットワークモデルでフレームを扱うには修正が必要である」というものであった。この批判がネットワークモデルの見た目（記法）にかんするものであるとすれば、図はあくまで説明のためのメタファーであって言語知識そのものではないということを確認すれば十分だろう。私（たち）の知識は、四角形や矢印によって構成されているわけではない¹⁸。

では、何らかの理由でネットワークモデルにはフレームが含まれていなかった（あるいは含

¹⁶ 個別の使用事象においては、慣習化の度合いに関わらず、喚起された認知プロセスの総体がその意味となる。

¹⁷ より正確に言えば、プロファイルはフレームから独立しているわけではなく、その一部である。

¹⁸ 図が一種のメタファーであることは、Langacker (2006, 2016a) でも丁寧に論じられている。

めることができない)と考えることは可能だろうか。ネットワークモデルは、「使用基盤モデル」(Langacker 1988, 2000, cf. 西村・長谷川 2018, 野村 2018) の一側面を捉えたものである。使用基盤モデルでは、言語知識 (の単位) はすべて、(他の知識から独立したモジュールとして存在するのではなく) 実際の使用事象 (usage event) から、共通する心的過程の強化を通じて抽出された、(形式と意味の対としての) 記号であると考えられる。フレームもまた言語知識であることから、実際の使用事象にフレームが含まれていさえすれば、批判 3 は退けられることになる。

そして、当然のことながら使用事象にはフレームが含まれている。このことは Langacker (2016b) によって明確に示されている。図 4 は table という語彙項目を例に使用事象の諸側面を図示したものである。ここに挙げられている (table という形式以外の) 全ての要素が、当の使用事象における table の意味である¹⁹。そこには、話し手・聞き手が特に注意を向けている領域 (Window) だけでなく、話し手・聞き手および、話し手と聞き手のやり取り (Ground)、言語表現の理解を支える知識 (Context)、理解の背景となる一般的知識 (Knowledge)、先行する使用事象・後続する使用事象を含む談話構造 (Discourse) が含まれている。(本稿の意味での) フレームが、これらの要素から構成されていることは言うまでもないであろう。

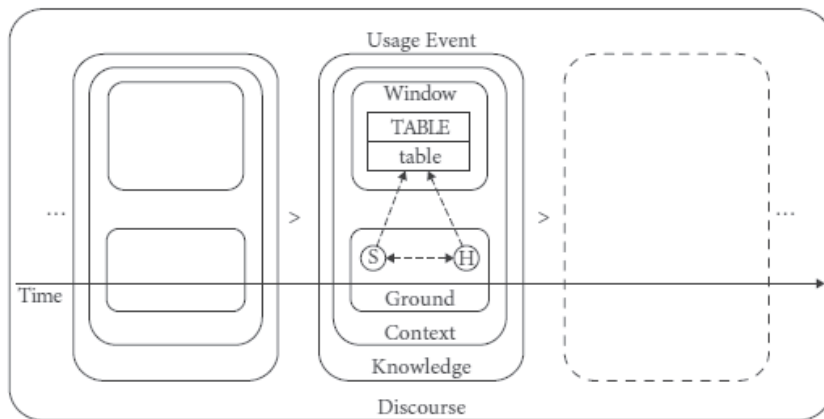


図 4 使用事象の諸側面 (Langacker 2016b: 30)

ネットワークモデルにおけるそれぞれの結節点は、より詳細に示すならば図 4 のようになるはずである^{20,21}。これにより批判 3 は退けられたと見なして良いであろう²²。

¹⁹ ここでもまた、図はメタファーとして理解されなければならない。たとえば、Context と Knowledge は実際には明確に区切られているわけではない。

²⁰ Langacker (1987: 4.2 節) の記述からすると、図 4 自体が複数の結節点からなるネットワークとして表象されることになるかもしれない。これもまた、どのようなメタファーを採用するかという問題である。

²¹ Langacker (2016b) ではさらに、言語表現を主体の感覚 (individual axis)、社会的なルーティン (interactive axis)、Objective Scene の描写 (descriptive axis)、当の使用事象と先行・後続の使用事象の関係 (discursive axis) という、4 つの軸によって捉えることも提案している。言語知識はあらゆる細部を含んだ使用事象から抽出されるため、全ての言語記号がこの全ての軸を程度の差はあれ含んでいるとされる。

²² 仮に、使用事象にフレームが含まれていないのだとすると、言語使用者は (ネットワークモデルは、言語知識の単位はすべて実際の使用から抽出されると考えているのであるから) フレームにあたる知識を習得できな

半ば繰り返しになるが、念のため、フレームが意味に含まれているという主張は、先行研究において批判の対象とされている時期の文献からも明らかであることを確認しておく。5 節でも触れたように、認知文法では百科事典的意味観を採用している。ここから、意味論と語用論の厳密な区別が排され、両者は意味という一つの領域のもとで包括的に扱われるという帰結が得られる (Langacker 1987: 4.2)。フレームはプロファイルの理解を支える重要な知識として、百科事典的意味の中に含まれているのである。

7. フレームと連合の観点から隣接性を捉えなおす

ネットワークモデルに対して成された批判を退けたところで、本稿におけるメトニミー規定すなわち、「単一フレーム内における焦点移動」(西村 2002: 299) をあらためて検討しておきたい。問題となるのは、この規定における「フレーム」が、実際には「認知領域、理想認知モデル、スクリプト (script)、一つの意味の規定に関わる複数の認知領域のまとまり (matrix) などを含む広義の用語」(西村 2002: 293) よりも限定されたものではないかという点である。例えば、目と耳はともに顔の重要な構成要素であり、したがってどちらも顔フレームに属しているが、(20) の「耳」が目を表したり、(21) の「目」が耳を表したりすることはない²³。フレームを共有しているというだけでは、メトニミーの基盤となる類似性には不十分である。

(20) *太郎は耳がよく見える。(「太郎は目がよく見える」を意図)

(21) *太郎は目がよく聞こえる。(「太郎は耳がよく聞こえる」を意図)

ここでも参考になるのは、bedes の事例である。5 節で述べたように Langacker (1987: 383f.) は、メトニミーの動機づけとして、共有されたフレームだけでなく、フレーム内での(折りと数珠玉の数の一致という)連合をも挙げている。西村 (2002: 297) は (22) について「〈ペダルを足で動かすことによって自転車を前進させる〉」というフレームを想定している。ここでは、自転車のペダルに働きかけることは自転車全体に働きかけ前進させることでもあり、強固な連合が成立していると考えられる。メトニミーには、フレームにおける連合、別の言い方をすると、連合によって構成されたフレームが必要なのである²⁴。

(22) = (2) 自転車をこいだ。 (西村 2002: 287)

いことになる。この(誤った仮定から生じた)問題を解決するためには、フレームは言語知識ではないと主張するか、フレームは生得的であると主張するしかないと思われる。これらの主張は、一部のフレームではなく全てのフレームに当てはまる必要があり、とうてい維持し難いものである。

²³ 太郎が目隠しをしていて、耳のほうが目よりも目立っていることが明らかな場合でも (20) は容認されないし、耳あてなどをしていて、目のほうが耳よりも目立っていることが明らかな場合でも (21) は容認されない。

²⁴ フレームによる連合が成立していれば必ずメトニミーが可能であると主張しているのではないことに注意されたい。

8. おわりに：コミュニケーションにおけるメトニミーの働き

言語によるコミュニケーションは、話し手が聞き手に対し、(典型的には)複合的な記号を手がかりとして提示することを通じて、意図した対象へと共同的に注意を向ける過程として捉えることができる。ここまで扱ってきた現象は、対象の側に主に関わるものであった。本節では手がかりの側に主に関わる例を検討することで、コミュニケーションにおけるメトニミーの働きの全体像を探る。

西山 (2003: 95) は、(23) は下線部の名詞句が指示的名詞句か変項名詞句かによって措定文として解釈されるか倒置指定文として解釈されるかが曖昧だと主張している²⁵。措定文の場合には、「ハイドンが最後に作曲した作品」によって、何らかの作品(西山の解釈例ではその楽譜)を指示し、それに対してピアノソナタという性質を帰しているのに対して、倒置指定文の場合には(24)に相当する解釈になるとされている。西山は(23)が措定文であるとしても倒置指定文であるとしても「真理条件的には違いがない」(西山 2003: 95)が、それでも両者には「思考において本質的な区別」(西山 2003: 96)があると指摘している。つまり、措定文の場合と倒置指定文の場合で、形式的には同一であるものの、そのどちらとして用いているのが未決定であることはありえないと想定されていることになる。

(23) ハイドンが最後に作曲した作品はピアノソナタだ。 (西山 2003: 95)

(24) ハイドンが最後に作曲した作品はどれかといえば、それはピアノソナタだ。
(西山 2003: 95)

その一方で、Langacker (2009: 67) は(25)の *cake* について、一切れのケーキを切り出すより大きな全体を表す場合も、一切れのケーキそれ自体を表す場合もあるが「多くの場合に、どちらかなのかは未決定である」と指摘している²⁶。この場合には、解釈が未決定である状態がフレームとなり、両者の解釈は多くの認知プロセスを共有しているという連合関係が成立している。そのため、これは手がかりの側のメトニミーであると言える。

(25) a slice of cake (Langacker 2009: 67)

(23) についても、同様のメトニミーが潜んでいると考えることも可能である。この文は、措定文であっても倒置指定文であっても、コミュニケーションに関与的な差異を生じさせない(ことが十分に多い)だろう。「ハイドンが最後に作曲した作品」がある対象を指示しているにせよ、命題関数を表示しているにせよ、認知文法の枠組みではどちらも何らかの対象をプロフ

²⁵ 措定文の例としては(c)が、倒置指定文の例としては(d)が挙げられる。

(c) 五嶋みどりはヴァイオリニストだ。 (西山 2003: 123)

(d) 花子殺しの犯人はあの男だ。 (西山 2003: 132)

²⁶ 日本語で表現するならば、前者の読みは「ケーキの一切れ」と、後者の読みは「一切れのケーキ」となるだろう。

ファイルし、「ピアノソナタである」という属性を帰していると考えられる。これが共通する意味（フレーム）として働き、さらに両者の解釈には多くの共有する認知プロセスが存在するため連合関係が成立している。そのため、共通するフレームを手がかりとして提示することによって、いずれかの解釈を経由し対象へ注意を向けることもできるし、フレームから直接にアクセス可能な対象へと注意を向けることもできる。

このように、メトニミーは対象の側だけでなく、手がかりの側においても生じる。Langacker (2009: 41) が指摘するように、「文法は基本的にメトニミー的」なのである。

参考文献

- 国広哲弥 (1994) 「認知的多義論：現象素の提唱」『言語研究』106: 22-44.
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』東京：大修館書店.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1988) A usage-based model. In: Brygida Rudzka-Ostyned. (ed.) *Topics in cognitive linguistics*, 127-161. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1995) Cognitive grammar. In: J. Verschueren et al. (eds.) *Handbook of pragmatics manual*, 105-111. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow et al. (eds.) *Usage-based models of language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2006) On the continuous debate about discreteness. *Cognitive Linguistics* 17: 107-151.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in cognitive grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2016a) Metaphor in linguistic thought and theory. *Cognitive Semantics* 2: 3-29.
- Langacker, Ronald W. (2016b) Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. In: Grzegorz Drożdż (ed.) *Studies in lexicogrammar: Theory and applications*, 23-53. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 松本曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」澤田治美 (編) 『語・文と文法カテゴリーの意味』: 23-43. 東京：ひつじ書房.
- 榎山洋介 (1997) 「慣用句の体系的分類：隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に」『名古屋大学国語国文学』80: 29-43.
- 榎山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』1: 29-58.
- 榎山洋介 (2016) 「形容詞「かたい」の意味：メトニミーとフレームの観点から」『言語文化論集』37 (2): 73-87.
- Nunberg, Geoffrey (1979) The non-uniqueness of semantic solutions: Polysemy. *Linguistics and*

Philosophy 3 (2): 143-184.

- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造』: 285-311. 東京 : 東京大学出版会.
- 西村義樹・長谷川明香 (2018) 「認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか?」高橋英光・野村益博・森雄一 (編) 『認知言語学とは何か』: 1-20. 東京 : くろしお出版.
- 野村益寛 (2018) 「認知言語学の意味観はどこが独自なのだろうか?」高橋英光・野村益博・森雄一 (編) 『認知言語学とは何か』: 23-41. 東京 : くろしお出版.
- Radden and Kövecses (1999) Towards a theory of metonymy. In: Klaus Panther et al. (eds.) *Metonymy in language and thought*, 17-59. Amsterdam: John Benjamins.
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』東京 : 講談社.
- 瀬戸賢一 (1997a) 「拡大するメトニミー : 認知言語学の問題点」『KLS』17: 67-77.
- 瀬戸賢一 (1997b) 「意味のレトリック」卷下吉夫・瀬戸賢一 (著) 『文化と発想とレトリック』: 93-177. 東京 : 研究社.
- 瀬戸賢一 (1997c) 『認識のレトリック』東京 : 海鳴社.
- Seto, Ken-ichi (2003) Metonymic polysemy and its place in meaning extension. In: Nerlich, Brigitte et al. (eds.) *Polysemy: Flexible patterns of meaning in mind and language*, Berlin: Mouton de Gruyter. 195-214.
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』: 31-61. 東京 : ひつじ書房.
- 瀬戸賢一 (2019) 「メタファー・メトニミー・シネクドキ」辻幸夫 (編) 『認知言語学大事典』: 303-314. 東京 : 朝倉書店.
- 坪井栄治郎 (2019) 「認知文法」辻幸夫 (編) 『認知言語学大事典』: 119-129. 東京 : 朝倉書店.
- 坪井栄治郎 (2020) 「認知文法」坪井栄治郎・早瀬尚子 (著) 『認知文法と構文文法』: 1-119. 東京 : 開拓社.

Metonymy and Similarity: Rethinking the Network Model

TANAKA Taichi

t.tanaka6002@gmail.com

Keywords: metonymy, similarity, network model, Cognitive Grammar

Abstract

Cognitive Grammar advocated by Ronald Langacker represents linguistic knowledge as a vast network of nodes and links between them. This model is a corollary of the "content requirement" that Cognitive Grammar has imposed on itself since its very beginning. Hence any defect in the model would cause a catastrophic problem for the theory. Many scholars have criticized the network model for failing to handle metonymy, citing the following reasons: (1) Similarity is not involved in metonymy; (2) Sharing a frame does not entail similarity of meaning; (3) The current network model needs to be substantially modified if it is to accommodate frames. In this paper, through one of Langacker's analyses, we will show these criticisms to be unfounded and indicate how the network model can adequately handle metonymy.

(たなか・たいち 東京大学大学院)